



HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	北海道大学文学研究院紀要, 第178号, 全1冊
Citation	北海道大学文学研究院紀要, 178
Issue Date	2026-02-26
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/98910
Type	journal
File Information	00_178_all.pdf



北海道大学

文学研究院紀要

第 178 号

北海道大学文学研究院

2026

北海道大学

文学研究院紀要

第178号

北海道大学文学研究院

2026

目次

アドヴァイタ諸文献における <i>Vedāntasiddhāntamuktavali</i> の <i>Svetāśvatropaniṣad</i> 4.5 の解釈の独自性	真鍋智裕
	

アドヴァイタ諸文献の中における *Vedāntasiddhāntamuktāvalī* の *Śvetāśvataropaniṣad* 4.5 の解釈の独自性

眞 鍋 智 裕

1. 序

Śvetāśvataropaniṣad (以後 ŚveU と略記) の第 4 章第 5 節では、神秘的な山羊 (aja, *m./ajā.f.*) の寓話が語られている。この ŚveU 4.5 の山羊の寓話は、精神と物質とを峻別する二元論に立脚するサーンキヤ思想 (Sāṃkhya) の淵源の一つと考えられており、そのためインド思想史上、二元論的に解釈されることが通例である¹。しかし、厳格な精神一元論に立脚するアドヴァイタ・ヴェーダーンタ学派 (Advaita Vedānta, 以後アドヴァイタ学派と略記) は、この ŚveU 4.5 を精神と物質の二元論を説いているのではなく、精神一元論を説いていると解釈している。

執筆者は、アドヴァイタ学派の学匠たちのうちでも、15 世紀から 16 世紀にかけて活動したと考えられるプラカーシャーナンダ (Prakāśānanda) が、彼の著作 *Vedāntasiddhāntamuktāvalī* (以後 VSM と略記) において行った ŚveU 4.5 に対する一元論的な解釈を分析し、ŚveU 4.5 に対する二元論的な解釈と対比した際のその特徴を明らかにした²。しかし、この VSM における

¹ 本多 [1980: 19-20], 湯田 [2000: 667] 参照。また眞鍋 [2026: fn. 1] も参照。

² 眞鍋 [2026] 参照。

ŚveU 4.5 に対するプラカーシャーナンダの一元論的な解釈は、アドヴァイタ学派の ŚveU 4.5 に対する解釈史上、どのような独自性があり、またどのような意義を持っているのか、という点まで検討するには至らなかった。そのため本稿では、先ずアドヴァイタ学派の諸文献における ŚveU 4.5 に対する諸解釈を分析・検討し、VSM における解釈も加えて比較する。そして以上の作業によって、ŚveU 4.5 に対するアドヴァイタ学派の解釈史において、VSM の解釈がどのような独自性を持っているのか、また VSM の解釈にどのような意義があるのか、という点を明らかにしたい。

以上のように、本稿は ŚveU 4.5 という聖典における聖句に対して、VSM を軸にアドヴァイタ学派の解釈史を明らかにするものである。アドヴァイタ学派は、主にウパニシャッド (Upaniṣad) 聖典群に対する解釈研究を主要な活動とするヴェーダーンタ学派の一派であるにもかかわらず、特定の聖典やその聖句に対するアドヴァイタ学派内での解釈史研究はこれまで十分に行われてきていない。本稿は、アドヴァイタ学派における聖典解釈史の解明という、従来の研究の不備を補うものである。

なお、VSM 以外に本稿において取り上げるアドヴァイタ学派の諸文献は、ヴェーダーンタ学派の根本経典 *Brahmasūtra* (BS) に対してアドヴァイタ学派の開祖シャンカラ (Śaṅkara, 8 世紀頃) が著わした註釈 *Brahmasūtrabhāṣya* (BSBh), シャンカラに帰せられているが、12 世紀から 14 世紀の間に成立した³と考えられる *Śvetāśvataropaniṣadbhāṣya* (ŚveUBh), 14 世紀頃のシャンカラナンダ (Śaṅkarānanda) の *Śvetāśvataropaniṣaddīpikā* (ŚveUŚD), ナーラーヤナ (Nārāyaṇa, 年代不詳) の *Śvetāśvataropaniṣaddīpikā* (ŚveUND) とヴィジュニャーナ・バガヴァット (Vijñānabhagavat, 年代不詳) の *Śvetāśvataropaniṣadvivaraṇa* (ŚveUV) である。

³ ŚveUBh の著者問題と成立年代に関しては Andrijačić [2018] 参照。

2. *Vedāntasiddhāntamuktāvalī* における *Śvetāśvataropaniṣad* 4.5 に対する解釈の概要⁴

上記のアドヴァイタ諸文献に見られる ŚveU 4.5 に対する諸解釈の検討に入る前に、眞鍋 [2026] において論じた VSM における ŚveU 4.5 に対する解釈の特徴を簡単に確認しておきたい。プラカーシャーナンダは、VSM においてアドヴァイタ学派のブラフマン (brahman=アートマン, ātman) 一元論の立場から、ŚveU 4.5 を一元論的に、また一我論 (ekajīvacāra) を教示するものとして解釈している。

アドヴァイタ学派は、宇宙の根本原理であるブラフマンと個的存在の根本原理であるアートマンが全く同一の実在であること、そのブラフマン=アートマンは唯一の実在である精神であること、またこの唯一の精神的実在であるブラフマン=アートマン以外のものは幻影に過ぎないことを主張しており、厳格な精神一元論に立脚している。上述の通り、この精神とはブラフマンのことであるので、アドヴァイタ学派は厳格なブラフマン一元論の立場を採っているといえることができる。さらに、アドヴァイタ学派は、このブラフマン (=アートマン, 最高のアートマン paramātman) が無明 (avidyā, 無知 ajñāna) の影響を受けることで、個々の神々や人間、動物や植物といった精神的存在である個我 (jīva[-ātman]) になると考えている。そして、その個我也本来的に唯一であると考え一我論と、個我は本来的に多数であると考え多我論 (anekajīvacāra) という2つの考え方が存在しており、アドヴァイタ学派にはこれら一我論と多我論の両方の考え方が存在している。プラカーシャーナンダはそのうちの一我論の立場に立脚しており、その一我論の典拠として ŚveU 4.5 を引用するのである。

当該の ŚveU 4.5 は以下の通りである。なお、VSM の一元論的な解釈の特

⁴ 本節は眞鍋 [2026] で論じた内容を簡潔にまとめたものである。詳細については眞鍋 [2026] を参照されたい。

徴について言及するために、以下の和訳はひとまず二元論的な解釈に従っている⁵。

ŚveU 4.5 :

ajām ekām lohitaśuklakṛṣṇām bahviḥ prajāḥ sṛjamānām sarūpāḥ /
 ajo hy eko juṣamāṇo 'nuśete jahāty enām bhuktabhogām ajo 'nyaḥ //
 実に、ある (eka) 雄山羊 (aja, *m.*, 不生のもの) は、同じ色をした多くの
 子孫を生みつつある、赤・白・黒をした一匹の (ekā) 雌山羊 (ajā, *f.*, 不
 生のもの) を楽しみつつ傍に寝る。別の (anya) 雄山羊は、享樂を享受
 し〔終わっ〕た彼女 (雌山羊) を去る。

この ŚveU 4.5 に対する二元論的な解釈では、男性形と女性形の「山羊」(aja/ajā) が「生じないもの」(不生のもの) という意味にもなるため、「雄山羊」を常住な精神原理「プルシャ」(puruṣa, *m.*, 字義的には「人間」, 個我に相当), 「雌山羊」を常住な物質原理である「根本物質」(pradhāna, *f.*, 根本原質 mūlaprakṛti と) であると考えている。さらに、「雌山羊」が赤・白・黒をしているということは、根本物質が、順に激質 (rajas)・純質 (sattva)・暗質 (tamas) の三属性 (triṣṇa) から成るというサーンキヤ思想の教理を意味していると解釈される。

以上の ŚveU 4.5 に対する二元論的な解釈に対して、プラカーシャーナンダは、“aja/ajā”を「山羊」ではなく「不生のもの」の意味でのみ理解し、男性形の「不生のもの」(aja)を「個我」と解釈する一方で、女性形の「不生のもの」(ajā)を「無明」(無知)と解釈している。アドヴァイタ学派において、無明(無知)はサーンキヤ思想の根本物質と同様に物質原理であるが、根本物質が常住な実在とされるのに対して、無明は有とも非有とも言い表せない、

⁵ 和訳に際して、Hauschild [1927: 22-23], Oberlies [1998: 81-82], Olivelle [1998: 424-425], 湯田 [2000: 494], Slaje [2009: 72] を参照した。ŚveU 4.5 に対する拙訳の方針に関しては真鍋 [2026] を参照。

究極的には実在しないものと考えられている。そのため、女性形の「不生のもの」を無明のことを指していると解釈することで、プラカーシャーナンダは、常住な「プルシャ」と「根本物質」という精神と物質の二元論を否定し、究極的には常住な「個我」のみが実在するという精神一元論を主張しているということになる。しかし、女性形の不生のものが「赤・白・黒」をしているということに関しては、プラカーシャーナンダは、無明が「激質・純質・暗質」という三属性から成ることを指していると解釈しており、根本物質が三属性から成ることと解釈している二元論的な解釈をそのまま採り入れている。

また、ŚveU 4.5 では、「雄山羊」すなわち個我について、“ekah” と “anyah” という区別が見られる。二元論的な解釈においては、この区別は「ある」(ekah) 個我と、それとは「別の」(anyah) 個我を表すものであり、前者は輪廻の状態にある個我、後者は解脱の状態にある個我に言及したものである。このような解釈は、多我論を前提としている。しかし、一我論の根拠として ŚveU 4.5 を提示する VSM は別な解釈を採用している。プラカーシャーナンダは、“ekah” を「一つ」、つまり唯一存在する個我を意味すると解釈しており、一方 “anyah” を無明とは「別のものである」個我を意味すると解釈している。個我は唯一存在するものであるため、「ある」個我も、無明とは「別のもの」と言われている個我と別のものではありません。そして、無明の傍に寝る個我とその無明を捨てる個我が同一であるため、プラカーシャーナンダは、ŚveU 4.5 を輪廻主体としての個我と解脱した個我との同一性、唯一性を主張するもの、つまり一我論を教示するものとして理解している。

3. アドヴァイタ教学史上の *Vedāntasiddhāntamuktāvalī* における *Śvetāśvataropaniṣad* 4.5 の解釈の特徴

3.1. 「赤・白・黒」は三元素なのか、三属性なのか

続いて、VSM におけるプラカーシャーナンダの ŚveU 4.5 に対する解釈の独自性を明らかにするために、以上の VSM における ŚveU 4.5 に対する解釈と、彼よりも先行する時代に著されたアドヴァイタ学派の文献と彼より

も後代に著されたアドヴァイタ学派の文献に見られる ŚveU 4.5 解釈とを比較したい。本節においては、プラカーシャーナンダに先行する文献として、シャンカラの BSBh 中の BS 1.4.8-10 箇所を主要な考察対象とし、ŚveUBh、シャンカラナンダの ŚveUŚD もも取り上げる。またプラカーシャーナンダ以降の文献として、ナーラーヤナの ŚveUND とヴィジュニャーナ・バガヴァットの ŚveUV を取り上げる⁶。なお、VSM の解釈の独自性が伺えると考えられる点に対してのみ、上記の諸文献に対する考察を行うこととする。それは、第一に「赤・白・黒」は何を意味するのかという視点と、第二に、“ekah” と “anyah” とは何を意味するのか、という視点の二点である。

まず、第一の「赤・白・黒」は何を意味するのか、という視点について以下で検討を加えたい。BS 1.4.9⁷ に対するシャンカラの BSBh において、ŚveU 4.5 の「赤・白・黒」は、激質・純質・暗質という三属性ではなく、火・水・食物（地）という三元素を意味すると解釈される。

BSBh 156, 15-157, 6 (on BS 1.4.9): bhūtatrayalakṣaṇaiveyam ajā vijñeyā, na guṇatrayalakṣaṇā.
kasmāt.

tathā hy eke śākhinas tejo'bannānām parameśvarād utpattim āmnāya teṣām eva rohitādirūpatām āmananti “yad agne rohitam rūpaṁ tejasas tad rūpaṁ yac chuklam tad apāṁ yat kṣṇam tad annasya” (*Chāndogyopaniṣad*, ChU, 6.4.1) iti. tāny eveha tejo'bannāni pratyabhijñāyante, rohitādisābdasāmānyāt, rohitādinām ca śābdānām rūpaviśeṣeṣu mukhyatvāt, bhāktatvāc ca guṇaviśayaivasya. asaṁdigdhena ca saṁdi-

⁶ ナーラーヤナとヴィジュニャーナ・バガヴァットの年代は不明であるが、ŚveUND と ŚveUV の記述内容から、プラカーシャーナンダ以降の思想家と判断した。この点について執筆者の恣意性が入っていることは否めない。

⁷ BS 1.4.9: jyotirupakramā tu tathā hy adhiyata eke // (しかし、[不生のものとは] 光を始めとする [三元素を特徴とするものと理解されるべきである]。何故なら、ある者たちはそのように伝承するから)。

gdhasya nigamanam nyāyāṃ manyante.

tathehāpi brahmavādinō vadanti. “kiṃkāraṇam brahma” (ŚveU 1.1) ity upakramya “te dhyānayogānugatā apaśyan devātmaśaktiṃ svaguṇair nigūḍhām” (ŚveU 1.3) iti pārameśvaryāḥ śakteḥ samastajagadvidhāyinyā vākyopakrame ’vagamāt, vākyaśeṣe ’pi “māyāṃ tu prakṛtiṃ vidyān māyinaṃ tu maheśvaram” (ŚveU 4.10) iti “yo yoniṃ yonim adhiṣṭhaty ekaḥ” (ŚveU 4.11) iti ca tasyā evāvagamān na svatantrā kācit prakṛtiḥ pradhānam nāmājāmantreṇāmnāyata iti śakyate vaktum. prakaraṇāt tu saiva daivī śaktir avyākṛtanāmarūpā nāmarūpayoḥ prāgavasthā anenāpi mantreṇāmnāyata ity ucyate. tasyāś ca svavikāraviṣayeṇa trairūpyeṇa trairūpyam uktam.

[ŚveU 4.5 における] この不生のもの (ajā) とは、三つの元素を特徴とするものに他ならないと認識されるべきであって、三属性を特徴とするものと [認識されるべきでは] ない。

【問】 どうしてか。

【答】 何故なら、次のように、ある [ヴェーダ] 枝派の者たちは、火・水・食物 (地) が最高神 (paramēśvara) から生じることを伝承して、同じそれらが赤等の色であることを伝承するから。「火の赤い色、それは火 [元素] の [色] であり、[火の] 白い色、それは水 [元素] の [色] であり、[火の] 黒い [色]、それは食物 (地) [元素] の [色] である」と。ここでも、同じそれら (赤・白・黒) は火・水・食物 (地) であると再認識される。赤等という語が同じであるから。また、赤等という諸語は、特定の諸の色を第一義とするから。また、[それらの諸語が] 属性を対象とすることは二義的であるから。また、疑われないことによって疑われたことに結論づけることは適切であると [彼らは] 考える。

ここ (ŚveU) においてもブラフマン論者たちは同様に述べる。「ブラフマンは何を原因とするのか」から「瞑想の実践に従事した彼らは、[それぞれ] 自身の属性によって隠された神、自身、能力を見た」と、全ての世界を創造する最高神の能力 (śakti) が文の冒頭に理解されるから、ま

た補足文においても「一方、原質（prakṛti）を幻力（māyā）と〔知るべきであり〕、一方、偉大な主宰神（maheśvara、最高神）を、幻力を持つ者と知るべきである」と、「ある者がそれぞれの母胎を支配する」と、同じそれ（最高神の能力）が理解されるから、根本原質（pradhāna）と呼ばれる如何なる自律的な原質（*svatantraprakṛti）も、不生のもの〔を説く〕マントラ（ŚveU 4.5）によって伝承されている、とすることはできない。一方、主題に基づいて、名称と形態を顕現させていない、同じその神的な能力が、名称と形態〔の顕現〕以前の状態を持って、このマントラ（ŚveU 4.5）によっても伝承されている、と言われる。そしてそれ（最高神の能力）に関して、〔能力〕自身の変化に関する〔火・水・食物という〕三つのあり方によって三つのあり方が説かれた。

ここでは先ず、ŚveU 4.5 の不生のものの「赤・白・黒」とは、ChU の教説との一致から、幻力（māyā）の変化した火（tejas）・水（ap）・食物（anna、地）という三元素のことであり、サーンキヤ思想が主張する三属性のことではない、ということが述べられている。というのも、「赤」等という語は特定の色を第一義としており、属性を対象とするのは第二義的な意味であるからである。そのため「赤」等という語は、その色をしている三元素のことが述べられているのであり、激質等の属性を意味しているのではない。

続いてシャンカラは、ŚveU 全体の冒頭にも、また ŚveU 4.5 に続く補足文においても、最高神の能力が教示されていると述べる。この最高神の能力は ŚveU 4.10 においては幻力とも呼ばれている。そしてこの能力あるいは幻力とは無知（無明）のことである⁸。ŚveU 全体の冒頭と ŚveU 4 の補足文において、非真実の無知である最高神の能力（幻力）が教示されているので、ŚveU 4.5 に見られる「不生のもの」（ajā）も同じ最高神の能力（幻力）のことであり、自律的な根本原理である根本物質（pradhāna）のことではない、というのである。そしてその最高神の能力（幻力）が変化（展開）した三つ

⁸ 無知（無明）が幻力と呼ばれることに関して、眞鍋〔2025〕を参照。

のあり方が、火・水・食物（地）という三元素なのである。

ŚveUBh と ŚveUŚD も以上の BSBh と同じく、「赤・白・黒」を、現象世界の原因（原質 prakṛti）⁹ である幻力のあり方、あるいは結果としての三元素のことであると解釈している¹⁰ が、プラカーシャーナンダより後代の二文献は違った解釈をしている。ŚveUND では、VSM と同様に「赤・白・黒」は三属性のことであると解釈している¹¹。一方、ŚveUV では「赤・白・黒」を三元素とする解釈と、三属性とする解釈の両方を併記している。当該の ŚveUV は以下の通りである。

⁹ ここで原質（prakṛti）という言葉は、サーンキヤ思想における根本物質と同義の専門用語として使用されているのではなく、物質的な現象世界の原因としての一般名詞として使用されている。この原質の用例は、本文で引用した BSBh on BS 1.4.9 にも見られるほか、VSM においても見られる。VSM 8, 1-4: kiṃ ca “neha nānāsti kiṃcana” (BAU 4.4.19), “māyām tu prakṛtiṃ vidyāt” (ŚvetU 4.10) iti ca pratipannopādhanīṣiddhyamānatvamāyāprakṛtivyābhyaṃ kṛtsnasya jagato mithyātvapradaśanena tadviśayasya pratyakṣāder aprāmāṇyasya śrutyaiḥ darsītatvāt (さらに、「ここには如何なる多様性も存在しない」と、また「一方、幻力を原質と知るべきである」と制約条件が理解される [ブラフマン] について [全世界が] 否定されていることと [全世界は] 幻力が原質であることによって、全世界が虚偽であることが示されているので、それ (全世界) を対象とする知覚等の非妥当性が同じ天啓聖典によって示されているので、[二元は真実とはならない])。

¹⁰ ŚveUBh 54, 23-25 (on ŚveU 4.5): idāniṃ tejo'bannalakṣaṇāṃ prakṛtiṃ chāndogyopaniṣatprasiddhām ajārūpakalpanayā darsayati — **ajām ekām** iti. **ajām** prakṛtiṃ **lohitaśuklakṛṣṇām** tejo'bannalakṣaṇāṃ **bahviḥ prajāḥ sṛjamānām** utpādayantiṃ dhyānayogānugatadṛṣṭāṃ devātmaśaktiṃ (Cf. ŚveU 1.3) vā (続いて、『チャーンドーギヤ・ウパニシャッド』においてよく知られている、火・水・食物を特徴とする原質を、不生のもの（雌山羊）のあり方を想定することで、示す。ある不生のもの（雌山羊）を、と。赤・白・黒をした、すなわち火・水・食物を特徴とする、多くの子孫を生みつつある、すなわち生じさせつつある不生のものに、すなわち原質に、ということである。あるいは、瞑想の実践に従事した者たちによって見られた神、自身、能力を、ということである）、ŚveUŚD 27, 18-25 (on ŚveU 4.5): **ajām** chāgām mūlaprakṛtiṃ buddhyā viniḥsāritacidrūpām. **ekām** sajātiyabhedasūnyām. **lohitaśuklakṛṣṇām**. raktaśvetakṛṣṇavarṇām, piṅgaladhūmaśyāmādinām raktādiṣv evāntarbhāvāt sarvavarṇām ity arthaḥ. … tathā ca kāryāṇāṃ tejo'bannānāṃ yāni rūpāṇi tāni māyāyām api santy eva. tato māyā lohitaśuklakṛṣṇarūpā na viruddheti (牝山羊を、とは、牝の山羊であり、根本原質（mūlaprakṛti）

ŚveUV 32,27-33,5 (on ŚveU 4.5): **ajām** na jāyata ity ajā tām mūlaprakṛtitvāj janmarahitām ity arthaḥ. ... **lohitaśuklakṛṣṇām** tejah sṛṣṭvā tadavasthāpannatvāl lohitām. apaḥ sṛṣṭvā tadavasthāpannatvāc chuklām. annaśabdavācyām pṛthvīm sṛṣṭvā tadavasthāpannatvāt kṛṣṇām. atha vā lohitām rajaātmikām śuklām sattvātmikām kṛṣṇām tamaātmikām evaṃ lohitaśuklakṛṣṇām.

不生のものを、とは、生じないという意味で不生のものであり、根本原質であるので誕生を欠いているそれを、という意味である。……赤・白・黒をした、とは、火を創出してから、その状態を得ているので赤いものである。水を創出してから、その状態を得ているので白いものである。食物という語によって述べられる地を創出してから、その状態を得ているので黒いものである。あるいはまた、赤いものは激質を本質としており、白いものは純質を本質としており、黒いものは暗質を本質としており、以上のように赤・白・黒をしたものを、ということである。

以上のように、ŚveUV では、「赤・白・黒」を三元素とする解釈と、三属性とする解釈が併記されている。しかし、特にどちらが定説とは述べられてはい

であり、統覚機能によって精神が発出されたことを本質とするものを、ということである。一つのものを、とは、同種で、違いを欠いたものを、ということである。赤・白・黒をした、とは、赤色・白色・黒色をした、ということである。黄褐色・灰色・青緑色等は、他ならぬ赤等に含まれるので、全ての色をした、という意味である。……また同様に、火・水・食物という諸の結果の諸のあり方、それらは幻力にも必ず存在する。したがって、幻力が赤・白・黒をあり方とすることは矛盾していない。なお、ŚveUBh では、BSBh に引用されていた ŚveU 1.3 を前提にして、「赤・白・黒」を「神・自身・能力」に対応させている。しかし、BSBh では「赤・白・黒」を「神・自身・能力」に対応させてはおらず、ŚveU 1.3 に最高神の「能力」が教示されていると解釈しているだけである。ŚveU 1.3 については Hauschild [1927: 4-5], Oberlies [1995: 81-82], Olivelle [1998: 415] と湯田 [2000: 481], Slaje [2009: 64] を参照。

¹¹ ŚveUND 20, 20 (on ŚveU 4.5): **ajām** māyām **lohiteti** guṇatrayamayim. **sarūpās** triguṇāḥ (不生のものをとは、幻力を、ということであり、赤〔・白・黒をした〕とは、三属性から為るものを、ということである。同じ色をした、とは三属性の、ということである)。

アドヴァイタ諸文献の中における *Vedāntasiddhāntamuktāvalī* の *Śvetāśvataropaniṣad* 4.5 の解釈の独自性がない。そうではあるけれども、ŚveUV が BSBh, ŚveUBh, ŚveUŚD といった註釈伝統を踏まえていると想定した場合、定説は三元素解釈であるが、三属性解釈も可能な解釈として付加したのではないかと考えられる。いずれにせよ、ŚveUND と ŚveUV においては、「赤・白・黒」を三属性とする解釈が排斥されることなく認められている。

3.2. 個我の多数性を認めるのか、個我は一つであるのか

第二に、ŚveU 4.5 中の “ekah” と “anyah” を諸文献がどのように解釈しているのかを見てみたい。この視点は、個我の多数性を認めるのか、認めないのかということに繋がるものである。シャンカラは BSBh on BS 1.4.10 において次のように述べている。

BSBh 157, 15–17 (on BS 1.4.10): *iyam api tejo'bannalakṣaṇā bhūtaprakṛtis trivarnā bahu sarūpaṃ carācaralakṣaṇaṃ vikārajātaṃ janayati, aviduṣā ca kṣetrajñenopabhujyate, viduṣā ca parityajyate iti.*

火・水・食物（地）を特徴とし、存在物の原質であり、三色を持つこれ（不生のものである最高神の能力）も、多くの、同じ色を持ち、動不動のものを特徴とする変異群を生み出す。そして、[その最高神の能力は] 無知な知田者 (kṣetrajña, 個我) によって享受され、一方 (ca), 知者によって放棄される。以上。

ここでは、無知な個我によっては最高神の能力が享受され、知者である個我によってはその最高神の能力が放棄されると述べられている。以上は “ekah” と “anyah” に対する直接的な註釈箇所ではないが、趣旨としては、“ekah” を「ある」個我, “anyah” をその個我とは「別な」個我とする、二元論的な解釈と同じものであると理解される。そうすると、ここでシャンカラは多我説の立場に依拠しているのであろうか。続けてシャンカラは以下のように述べている。

BSBh 157,17-20 (on BS 1.4.10): na cedam āśaṅkitavyam. ekaḥ kṣetrajña 'nuśete, anyo jahātity ataḥ kṣetrajñabhedatḥ pāramāthikāḥ pareṣāṃ iṣṭatḥ prāpnotiti. na hīyaṃ kṣetrajñabhedapratipipādayiṣā. kiṃ tu bandhamokṣavyavasthāpratipipādayiṣaivaīṣā. prasiddham tu bhedaṃ anūdyā bandhamokṣavyavasthā pratipādyate.

また、以下のことは懸念されるべきではない。すなわち、ある知田者 (kṣetrajña) は傍に寝て、別の [知田者] は去るので、したがって、他者たちにとって望まれた、知田者の違いが真実なものとなる、と。というのも、これは、知田者の違い (bheda) を教示しようとするものではなく、むしろこれは、束縛と解脱の識別 (vyavasthā) を教示しようとするものに他ならないから。しかし、周知されている違いに比喩的に言及して (anūdyā)、束縛と解脱の識別が教示されている。

ここでのシャンカラの主張の趣意は以下のようなものである。ŚveU 4.5 では知田者、すなわち個我の違いが述べられている。しかし、ŚveU 4.5 の真意は、その個我の違いの教示にあるのではなく、束縛と解脱の識別の教示にあるのである。よって、多我論者たちの「個我の違いは真実なものである」という主張が帰結することを懸念する必要はない、というのである。ここでシャンカラは明白に一我論を主張しているというわけではないが、多我論が帰結するという懸念はないということで、間接的に一我論を支持していると解釈することができよう。

この“ekaḥ”と“anyaḥ”に対する解釈について、ŚveUBh はBSBh と同じ立場を採っている¹²。しかし、他の諸文献は解釈がそれぞれ異なっているよ

¹² ŚveUBh 54, 26-28 (on ŚveU 4.5): **ajo hy eko** vijñānātmanādikāmakarmavināśitāḥ svayaṃ ātmānaṃ manyamāno **juṣamānaḥ** sevamāno 'nuśete bhajate. **anya** ācāryopadeśa-prakāśavasāditāvīdyāndhakāro **jahāti** tyajati (実に、ある不生のもの、すなわち認識を本性とし、無始 [来] の欲望と行為によって損なわれ、自から自身であると考えているものは、楽しみつつ、すなわち堪能しつつ、傍で横たわる、すなわち享受する。別なもの、すなわち先生の教示の輝きによって無明という闇が消尽したものは [それを] 去る、す

アドヴァイタ諸文献の中における *Vedāntasiddhāntamuktāvalī* の *Śvetāśvataropaniṣad* 4.5 の解釈の独自性に思える。

ŚveUŚD では、“ekah” は「一つの」個我を意味しており，“anyah” は個我とは「別のもの」である主宰神、あるいは解脱した個我を意味している。先ず，“ekah” に関して見たい。

ŚveUŚD 27,25-28,7 (on ŚveU 4.5): **ajaś** chāgo jīvaḥ ... **eko** upādher avidyāyā aikyād ekah. ... tasmād ekaivāvaraṇarūpāvidyānekair vikṣepar-ūpair āvirbhavaty ā brahmajñānam, badarīvā badarībījadāham. ... **anuśete** nidrāṇām anu nidrām karoti. svayaṃprakāśo 'pi prakṛter jādyena tām ātmīyatvena manyamāna ānandātmānam na pratyeti arthaḥ. ayaṃ bandhaḥ. itaḥ paraṃ mokṣaḥ.

雄山羊とは、雄の山羊であり、個我である。……一つのものとは、制約条件である無明と同一であるので、一つのものである。……それ故に、全く一つの、覆障をあり方とする無明が、多数の散出のあり方で、ブラフマンの知〔の獲得〕まで現われる。棗の樹が、棗の樹の種を燃やすものの〔の獲得〕まで〔現われる〕ように。……側で寝るとは、諸の眠りに従って眠りを為す、ということである。自ら輝く者であったとしても、原質の物質性によって、それ（原質）を自身のものと考えているので、〔自身を〕歓喜を本性とするものと認識しない、という意味である。これが束縛である。これとは反対に、解脱がある。

ここでの議論の趣旨を説明すると以下のようなだろう。多くのものを散出することをあり方とする一つの無明がブラフマンの知、すなわち真実の知の獲得まで現われる。その無明を制約条件とする個我は、無明に覆われて無明と同一のものとなっているので、一つのものであるというのである。そしてそ

なわち捨て去る)。しかし、BSBh とは違って多我説に対する懸念の払拭の議論はなされていない。ŚveUBh では BSBh の議論を当たり前の前提としており、そのため特別に多我説への懸念を払拭する必要もないと考えていた、と考えることもできるが、真意は不明である。

の一つの個我が、自ら輝く者、すなわち認識主体であったとしても、原質、すなわち無明を自身のものと考えているので、自身を、歓喜を本性とするものと認識せず、束縛の状態に陥るのである。しかし、同じ一つの個我が、制約条件である無明を取り払い、無明を自身のものと考えなくなると、自身を、歓喜を本性とするものと認識し、解脱の状態に至るのである。以上の議論は、VSM と同様、一我論の立場に立脚したものと考えられる。

続いて、“anyah” に対する ŚveUŚD における解釈を見てみたい。

ŚveUŚD 28,7-11 (on ŚveU 4.5): **jahāti** parityajati. **enām** māyām āvaraṇavikṣeparūpām. **bhuktabhogām** bhukto bhogo yayā sā bhuktabhogā tām brahmajñānāgninā pluṣṭasarvāṅgām ity arthaḥ. **ajaś** chāga īśvaro nityābaddho janimaraṇādirahito nityamuktaḥ. **anyaś** cittena kalpitabhedo baddhādyatiriktaḥ svayaṃprakāśamānaśaṃvidānandātmanmātra ity arthaḥ.

去とは、放棄する、ということである。これをとは、覆障 (āvaraṇa) と散出 (vikṣepa) をあり方とする幻力を、ということである。享樂を享受し [終わっ] たとは、それによって (yayā) 享樂が享受され [終わっ] た、そのものが (sā) 享樂を享受し [終わっ] たものであり、ブラフマンの知という火によって全ての部分が焼かれたそれ (幻力) を、という意味である。雄山羊とは、雄の山羊であり、主宰神 (īśvara) であり、常に束縛されておらず、生と死等を欠いており、常に解脱した者、ということである。他のものとは、[その者に対して] 心によって違いが想定された、束縛された者等とは異なり、単に自ら輝いている感受と歓喜を本性とする者、という意味である。

ここでは、“ajaḥ” が主宰神と解釈されている。そのため、無明に覆われて束縛された「一つの」個我と、それとは「別の」束縛を欠いた主宰神と、ひとまず個我と主宰神が対比的に言及されていると考えられる。しかし、幻力がブラフマンの知によって焼かれたものと解釈されていることから、この “ajo

アドヴァイタ諸文献の中における *Vedāntasiddhāntamuktāvalī* の *Śvetāśvataropaniṣad* 4.5 の解釈の独自性

‘nyaḥ’ は、単に主宰神のみを意味するのではなく、解脱した状態にある個我のことを意味しているとも考えられよう。つまり、解脱した個我を主宰神（ブラフマン）と呼んでいるという解釈である。そのように解釈したとしても “ekaḥ” を「一つ」と数的な意味で理解する解釈を変更しなければならない要因は存在しないので、文献上 ŚveUŚD は依然として一我論の立場に立っていると指摘できる。

ŚveUND は、“ekaḥ” と “anyaḥ” で、輪廻者である個我と最高のアートマンの対比を意図している。

ŚveUND 20,20-22 (on ŚveU 4.5): **ajo hy ekaḥ** saṃsāri **juṣamāṇaḥ** priyamāṇo **'nusṛtya śete** svasthatāṃ manyate. **ajo 'nyo** virakto vimuktaḥ paramātmā tv ekarūpa eva na **bhogān bhuṅkte nāpi jahāti**.

実に、ある不生のもの、すなわち輪廻者は、楽しみつつ、すなわち喜びつつ、経験して休息する、すなわち[幻力を]自身にあるもの (svasthatā) と考える。一方、別の不生のもの、すなわち無欲で解脱している最高のアートマンは、唯一のあり方を持つ者に他ならず、諸の享楽を享受せず、また[諸の享楽を] 捨てない。

この ŚveUND の解釈は、二種類の不生のものを厳然と対比させている。すなわち、「ある」不生のものである輪廻者、つまり個我と、それとは「別の」不生のものである最高のアートマンとの対比である。輪廻世界という迷いの世界にいる世俗的な不生のものと、輪廻世界を超越した勝義的な不生のものとの対比ということもできよう。というのは、最高のアートマンは諸の享楽を享受せず、それ故に諸の享楽を捨てることもない、と最高のアートマンの超越性が言及されているからである。したがって、ŚveUND は一我論・多我論といった個我論を意図した解釈をしていないと言い得よう。

一方 ŚveUV では、シャンカラの解釈とプラカーシャナーンダの解釈の折衷的な立場が採られている。先ず、“ekaḥ” についての ŚveUV の解釈を見てみたい。

ŚveUV 33, 11-16 (on ŚveU 4.5): **ajo** janmarahito **hi** yasmād **eko** 'nādikālapra-
vṛttāvidyākāmakarmapāśapāśitaḥ kṣetrajño yasmāt prakṛtīvivartatvāt
prakṛtyātmakatvāc chabdādiviśayāvasthāpannām prakṛtiṃ **juṣamāṇaḥ**
sevamānas tannimittabhogeṣu prīyamāṇas **cānuśete** svayam avikārya-
saṅgasukhasaṃvinmātraikarasaḥ paramātmārūpaḥ svataḥ sarvasaṃsāra-
dharmān āskanditaḥ prakṛtau tadvivartānnamayādipañcakoṣeṣu jale ca-
ndravād anupraviśya taddharmān svadharmatvena svikṛtya prakṛtiprā-
kṛtāmś **cānuśṛtya śete** vartate.

というのも、すなわち何故なら、不生なもの、すなわち誕生を欠いたあ
るもの、すなわち無始時に発動した無明による欲望や行為という索縄に
よって縛られた知田者は、何故なら〔語等という対象は〕原質の仮現し
たものであるの、原質を本性とするものであるの、語等という対象
の状態を得た原質を楽しみつつ、すなわち堪能しつつ、またそれを契機
とする諸享樂を喜びつつ、執着する (anuśete)、すなわちそれ自体、不変
者 (avikārin) であり、無執着 (asaṅga) であり、楽であり、単なる感受
であり、一味であり、最高のアートマンをあり方とするものが、それ自
体で全ての輪廻〔に属する〕諸特性の影響を受けて、それ（原質）の仮
現した食物から成るもの等という五つの覆いの内の水に月が〔入り込む、
つまり映り込む〕ように、原質に入り込んで、その諸特性を自身の特
性として認めて、また原質と原質由来のものとを追求してから〔その状
態で〕いる、すなわち存在する。

ここでは、本来最高のアートマンをあり方とするものが、無明、すなわち原
質の影響を受け、原質の中に入り込んで知田者、つまり個我となり、原質と
原質に由来する多様な現象世界を経験することが述べられている。上記の記
述によると、特にここでの“ekah”は数的に「一つのもの」を意図している
ものではないようである。

続いて、“anyah”に対する ŚveUV の解釈の検討に移りたい。

ŚveUV 33,23-25 (on ŚveU 4.5): **ajah** paramātmārūpatvān na jāyata ity **ajah**. **anyah** prakṛtitadvikārasākṣitvāt tebhyo 'nyah. ahaṃ brahmāsmīty aparokṣikṛtatvāt prakṛtitadvikārābhedābhimāninaś cājñānino 'nyah.

不生のものとは、最高のアートマンをあり方とするので、生じない、という意味で不生のものである。別のものとは、原質とその（原質の）変容物の目撃者であるので、それら（原質とその原質の変容物）とは別なものである。また、私はブラフマンである、と直証した者であるので、原質とその（原質の）変容物と違いがないと思ひ込む無知なものとは別のものである。

ここでの不生のものとは、最高のアートマンをあり方とする、と述べられているので、最高のアートマンそのものを指しているのではなく、個我のことを指していると考えられる。そして ŚveUV では、“anyah” に対して二つの解釈が併記されている。そのうちの第一は、不生のものである個我が、原質とは「別のもの」であるという解釈である。この解釈は、無明が個我とは「別なもの」であると理解していたプラカーシャーナンダの解釈と同じものである。第二の解釈は、「私はブラフマンである」ということを、私とブラフマンの同一性を直証した個我、すなわち解脱した個我が、自身と、原質とその変容物とに違いがないと思ひ込んでいる無知な個我とは「別のもの」であるというものである。これは、多我論的なシャンカラの解釈と同じものである。

以上のように、ŚveUV では、プラカーシャーナンダとシャンカラの解釈の両方を、特に優劣をつけるでもなく併記している。しかし、プラカーシャーナンダと同じ解釈を採る場合でも、全体として明確に一我論を主張しているわけではない。そこが ŚveUV と VSM の解釈の相違点である。また、シャンカラと同様に多我論的な解釈を採っている場合でも、明確に多我論を主張しているとも言い得ない。ŚveUV で明示されてはいないが、註釈の伝統ということを考慮すると、多我論的な立場は、シャンカラ同様に、多我論そのものを主張しているというよりも、束縛と解脱の状態の違いを示すことを意図していると考えた方がいいであろう。

3.3. アドヴァイタ諸文献における Śvetāśvataropaniṣad 4.5 に対する解釈の整理

以上, アドヴァイタ学派の諸文献における ŚveU 4.5 に対する解釈を, 「赤・白・黒」は何を意味するのか, “ekah” と “anyaḥ” とは何を意味するのか, という二つの視点から検討してきた。以上の検討内容を整理すると表 1 のようになる。

表 1：アドヴァイタ諸文献における ŚveU 4.5 解釈

視点 1：「赤・白・黒」の意味		
BSBh	火・水・食物（地）の三元素	
ŚveUBh	火・水・食物（地）の三元素	
ŚveUŚD	火・水・食物（地）の三元素	
VSM	激質・純質・暗質の三属性	
ŚveUND	激質・純質・暗質の三属性	
ŚveUV	第一説：火・水・食物（地）の三元素 第二説：激質・純質・暗質の三属性	
視点 2： “ekah” の意味 “anyaḥ” の意味		
BSBh	「ある」無知な個我	ある無知な個我とは「別の」解脱した個我 （＝束縛の状態とは「別の」解脱した状態の個我）
ŚveUBh	「ある」無知な個我	ある無知な個我とは「別の」解脱した個我
ŚveUŚD	「一つの」個我	個我とは「別の」主宰神（束縛の状態とは「別の」解脱した状態の個我？）
VSM	「一つの」個我	無明とは「別の」一つの個我
ŚveUND	「ある」個我	個我とは「別の」最高のアートマン
ŚveUV	「ある」無知な個我	第一説：原質（無明）とは「別の」個我 第二説：ある無知な個我とは「別の」解脱した個我

まず, 視点 1 の「赤・白・黒」の意味に関しては, BSBh, ŚveUBh, ŚveUŚD という VSM より前の諸文献においては, それらは三元素を意味するものと解釈されているのに対して, VSM と ŚveUND では, 三属性を意味するもの

アドヴァイタ諸文献の中における *Vedāntasiddhāntamuktāvalī* の *Śvetāśvataropaniṣad* 4.5 の解釈の独自性と解釈されている。また ŚveUV においては、両説が併記されている。後期アドヴァイタ学派においては、本稿で引用した BSBh にも言及されている ŚveU 4.10 に依拠して、幻力（無明）と原質が等値されるようになり、その影響で原質を三属性から成るものとするサーンキヤ思想もアドヴァイタ教学の中に流入し、幻力（無明）が三属性から成るという考え方が定着していく¹³。ŚveUBh と ŚveUŚD の成立した時期には、幻力（無明）が原質であるとする考え方は既にアドヴァイタ教学の中に入り込んでいる¹⁴が、おそらく両著は BSBh のシャンカラの見解に従い、サーンキヤ思想の根本物質と幻力（無明）との相違を強調しているのであろう。一方、VSM と ŚveUND の成立時期には、幻力（無明）が三属性から成るという考え方がアドヴァイタ教学の中で既に定着しており、根本物質との相違を強調する必要を感じなかったのではないであろうか。ŚveUV の両説併記という立場は、伝統的なシャンカラの解釈も、当時のアドヴァイタ教学として定着していた幻力（無明）が三属性から成るという解釈も定説であるという見解を表明したものであると考えられる。

視点2の“ekah”と“anyah”の意味に関しては、文献間で全く同一の立場を採っている解釈はないようである。ŚveUBh はシャンカラに帰せられていることもあり、BSbh と同一解釈を採っているように思えるが、一我論的な立場を採用しているかどうか、明確な記述がないために断定できない。VSM の解釈を軸にそれぞれの文献の解釈を見てみると、VSM と ŚveUŚD のみが明確に一我論の立場に立っていることが指摘できる。しかし“anyah”の解釈は、ŚveUŚD が主宰神という解釈を採っているため、両文献で異なっ

¹³ 中村 [1996: 300] と眞鍋 [2025] 参照。

¹⁴ 幻力（無明）を原質とする考え方は、シャンカラの直弟子であるパドマバーダ (Padmapāda, 9世紀頃) の *Pañcapādikā* (PP) に既に見られる。PP 15, 2-3: “prakṛtiṃ puruṣaṃ caiva viddhy anādi ubhāv api” (*Bhagavadgītā* 13.19) iti kṣetrakṣetrajñatvanirmitam anādisiddhām avidyām prakṛtiśabdenāha (「原質とプルシャの両方とも、無始であると知れ」と田地であることと知田者であることに分けられた、無始[時]に成立した無明を、原質という語によって述べた)。

ている。また ŚveUV においては, “anyah” の解釈は BSBh の解釈と VSM の解釈の両論併記となっており, 視点 1 と同様にシャンカラの解釈とプラカーシャーナンダの解釈とを両方取り入れているように思える。しかし “ekah” の解釈は, シャンカラの解釈に従っており, 文面上, プラカーシャーナンダのように一我論の立場を採っているということとはできない。

5. 結論

以上の考察の結果, VSM におけるプラカーシャーナンダの ŚveU 4.5 に対する解釈の独自性について, 以下のようにいうことができよう。サーンキヤ思想の二元論的な解釈に対しては, “ajā” を根本物質ではなく, 本来的には非真実な無明(幻力)と読み替えることによって, 一元論の立場を保持している¹⁵。さらに, 一元論的解釈を採用するアドヴァイタ学派の諸文献と比較すると, その無明(幻力)が三属性から成るとしている点が, それまでの諸文献には見られず, それ以降の諸文献に影響を与えたと考えられる VSM の特徴であると考えられる。さらに, VSM は “ekah” を「一つ」の個我, “anyah” を無明とは「別の」個我と解釈することによって, 一我論の立場を鮮明に打ち出しているということができる。またこの点について, 同じく一我論の立場を採りながらも, ŚveUŚD が “anyah” を個我とは別の「主宰神」であると解釈しているのに対して, VSM では, あくまでも無明とは「別の」同じ一つの個我であるとして, 徹底して個我の議論のみを行っている点に VSM の独自性が見られる。

しかし, 無明(幻力)が三属性から成るという ŚveU 4.5 に対する解釈が VSM に始まるのか, あるいはそれ以前の文献に遡るのか, 全てのアドヴァイタ学派の文献を検討したわけではないので, 未だ確定することはできない。また, VSM が徹底した一我論の立場を採っている点に関しても, VSM のみの独自の特徴であるのか否かも断定することはできない。これらの問題につ

¹⁵ 眞鍋 [2026] も参照。

アドヴァイタ諸文献の中における *Vedāntasiddhāntamuktāvalī* の *Śvetāśvataropaniṣad* 4.5 の解釈の独自性
いては、より多くのアドヴァイタ学派の諸文献に見られる *ŚveU* 4.5 に対す
る解釈を検討することが必要となる。この点は今後の研究課題としたい。

参考文献

一次資料

- BAU *Bṛhadāraṇyakopaniṣad: The Early Upaniṣads: Annotated Text and Translation.* Patrick Olivelle. New York: Oxford University Press, Inc. 1998.
- BS *Brahmasūtra* (Bādarāyaṇa): *Brahmasūtra with Śāṅkarabhāṣya.* (Works of Śāṅkarācārya in Original Sanskrit Vol. III) Dillī: Motilal Banarsidass 1985 (Repr: 2007).
- BSBh *Brahmasūtrabhāṣya* (Śāṅkara): See BS.
- ChU *Chāndogyaopaniṣad*: See BAU.
- PP *Pañcapādikā* (Padmapāda): *The Pañcapādikā of Padmapāda: Vol. II. Part I. Sanskrit Text.* Ed. Rāmaśāstrī Bhāgavatāchārya. (The Vizianagram Sanskrit Series No. 3) Benases: E. J. Lazarus & Co. 1891.
- ŚveU *Śvetāśvataropaniṣad: Kṛṣṇayajurvedīyaśvetāśvataropaniṣadacchāṅkarabhāṣyopēta: tathā Śāṅkarānandakṛtā Śvetāśvataropaniṣaddīpikā, Nārāyaṇakṛtā Śvetāśvataropaniṣaddīpikā, Vijñānabhagavatkr̥taṃ Śvetāśvataropaniṣadvivaraṇam.* Ed. Vināyaka Ganeśa Āpaṭe (Ānandāśrama Sanskrit Series No. 17) Poona: Ānandāśrama Press 1927.
- ŚveUBh *Śvetāśvataropaniṣadbhāṣya* (Śāṅkara): See ŚveU.
- ŚveUŚD *Śvetāśvataropaniṣaddīpikā* (Śāṅkarānanda): See ŚveU.
- ŚveUND *Śvetāśvataropaniṣaddīpikā* (Nārāyaṇa): See ŚveU.
- ŚveUV *Śvetāśvataropaniṣadvivaraṇa* (Vijñānabhagavat): See ŚveU.
- VSM *Vedāntasiddhāntamuktāvalī* (Prakāśānanda): *The Vedānta Siddhāntamuktāvalī of Prakāśānanda: with English Translation and Notes.* Arthur Venis. Benaras: The Medical Hall Press 1898.

二次資料

- Andrijačić, Ivan. 2018. “Śāṅkara and the authorship of Śvetāśvataropaniṣad-Bhāṣya,” *The Journal of Hindu Studies* 12 (3): 273–291.
- Gambhirananda, Swami. trans., 1965. *Brahma-Sūtra-Bhāṣya of Śrī Śāṅkarācārya.* Calcutta: Advaita Ashrama (6th Impr: 1996).
- Hauschild, Richard. trans., 1927. *Die Śvetāśvatara-Upaniṣad: Eine Kritische Ausgabe mit*

- Einer Übersetzung und Einer Übersicht Über Ihre Lehren.* Leipzig: Deutsche Morgenlandische Gesellschaft.
- Oberlies, Thomas. 1995. "Die Śvetāśvatara-Upaniṣad: Edition und Übersetzung von Adhyāya I (Studien zu den „mittleren“ Upaniṣads II – 1. Teil).," *Wiener Zeitschrift für die Kunde Südasiens* 39: 61-102.
- Olivelle, Patrick. trans., 1998. *The Early Upaniṣads: Annotated Text and Translation.* Patrick Olivelle. New York: Oxford University Press, Inc.
- Slaje, Walter. trans., 2009. *Upanischaden Arkanum Des Veda: Aus dem Sanskrit übersetzt und herausgegeben.* Frankfurt am Main, Leipzig: Verlag der Weltreligionen.
- Thibaut, George. trans., 1904. *Vedānta-Sūtras with the Commentary by Śaṅkarācārya*, Part 1. (The Sacred Books of The East Vol. 34) Oxford: Oxford University Press 1904 (Repr.: Delhi: Motilal Banarsidass 2004).
- Venis, Arthur. trans., 1898. *The Vedānta Siddhāntamuktāvalī of Prakāśānanda:* with English Translation and Notes. Benaras: The Medical Hall Press.
- Venkataramiah, D. trans., 1948. *The Pañcapādikā of Padmapāda.* (Gaekwad's Oriental Series No. CVII) Broda: Oriental Institute.
- 金倉円照. 1980. 『シャンカラの哲学（上）——ブラフマ・スートラ釈論の全訳』春秋社.
- 中村元. 1996. 『中村元選集〔決定版〕第27巻 ヴェーダーンタ思想の展開』春秋社.
- 本多恵. 1980. 『サーンキヤ哲学研究（上）』春秋社.
- 眞鍋智裕. 2025. 「ブラフマン一元論学派における現象世界の形成理論——映像説による主宰神・個我の成立」桂紹隆監修, 片岡啓・護山真也編『インド哲学の万華鏡』春秋社, pp. 91-112.
- . 2026. 「VedāntasiddhāntamuktāvalīにおけるŚvetāśvataropaniṣad 4.5の解釈とその特徴」『早稲田大学高等研究所紀要』第18号（印刷中）.
- 湯田豊. 2000. 『ウパニシャッドー翻訳および解説』大東出版社.
- . 2006. 『ブラフマ・スートラ—シャンカラの註釈（上）』大東出版社.

執筆者紹介

眞 鍋 智 裕 (宗教学インド哲学)

北海道大学
文学研究院紀要
第一七八号

令和8年2月26日 発行

編集者

北海道大学文学研究院長

川 端 康 弘

発行者

北海道大学

(株) アイワード

**Bulletin of the Faculty of
Humanities and Human Sciences,
Hokkaido University**

CONTENTS

The Uniqueness of the Interpretation of <i>Śvetāśvataropaniṣad</i> 4.5 in the <i>Vedāntasiddhāntamuktāvalī</i> among the Advaita Texts. Tomohiro MANABE	(Left) 1
---	-------------